

## 現代の大母像 イメージをつなぐ象徴 論文要旨

### はじめに 原子の灯りが消えた時、原始の心が灯りだす

本論の副題である「イメージをつなぐ」ということに対して思いを巡らすようになったきっかけがある。それは2011年3月11日に起きた、東日本大震災である。

その時私は銀座を車で移動中であった。大きな地面の揺れと共に眼前のビル群はまるで豆腐で出来ていたと言わんばかりに大きくうねりしなっていた。それら震災の光景は全く荒唐無稽であった。目の前の景色は私の脳裏に描かれる水平と垂直によって構築される普遍的な都市の光景とはかけ離れたものであった。

その時には「想定外」という言葉がよく使われていたが、普段何気なく過ごしていた日常というものは、本来世界が孕んでいるはずの「想定外」というものを除外することで成り立っていたのだという事実が突きつけられたのである。

秩序の崩壊した世界には、「想定」も「想定外」も混在した結果生じた瓦礫が山積していた。私はまずはその瓦礫を併置することから始めた。すると、そこには意味の連想が生まれ始めたのである。

### 第一章 文化の古層 太母像との出会い

第一章では自身の制作で用いる北方ルネサンスの技法をより学ぶために学部3年次に行った2ヶ月のヨーロッパ旅行での経験を通して体感したことを論じる。

その旅行は北方ルネサンスの作家達がイタリアのルネサンスに憧れて通った旅路を辿るためにイギリスからイタリアへと南下するものであった。しかし実際にその道程の中で自身が興味を最も抱いたものは『ヴィレンドルフのヴィーナス』という古代の文物であった。このことを北方ルネサンスの絵画構造に照らして考えると、この旅で見えて感じてきたものは、ヨーロッパの支持体、地塗りに位置するものから照り返された光を通して感覚されたものであった。そして支持体、地塗りという最下層、古層に位置していたものが『ヴィレンドルフのヴィーナス』であり、ここにおいて自身の制作における重要なモチーフとなる太母像が浮上するのである。

### 第二章 古代人の思考方法

制作において様々な断片を並置させていくことから始めてきた。それらのものが、『ヴィレンドルフのヴィーナス』という太母像の持つイメージをきっかけに、連想思考によってつながりだし新たなイメージを生み出し始めたのである。そのような連想

思考において私が最も親和性を抱いたのは民俗学者、国文学者である折口信夫による「別化性能」と「類化性能」という思考を参照し、古代人による連想思考を参照する。また河合隼雄による「父性社会」と「母系社会」という考えをもとに、イメージを断ち切るのではなく、つなげていく、包含するというあり方から太母像の姿を考察していく。そしてエーリッヒ・ノイマンによる『意識の起源史』を引用しながら太母像という存在を明らかにしていく。

### 第三章 現代の太母像

第二章で論じた古代人の思考方法、太母像の顕れる状況が現代においても脈々と息づいていることを論じる。そしてその論に則り、現代に顕れる太母像を、自作を通して論じていく。また現代の我々を取り巻くインターネット環境、ネット時代だからこそ顕れる太母像というものを論じる。

### 第四章 「永遠の少年」の可能性

太母の子宮の中で未だの状況にいる「永遠の少年」という状況を、自作を通して論じていく。西欧的近代自我が自然とのつながりと断ち切られることで生まれるものだとすると、日本という場所は4つのプレートが重なり合っていることで動き続けており、その地盤からつながりを断ち切ることは難しい。そのような状況を未発達な自我として太母に囚われていることと捉えるのではない、新たな捉え方を提示する。

自身の出身である愛媛、四国にまつわる、弘法大師空海が明けの明星と合一するという悟りに至るエピソードを元に「永遠の少年」の可能性を論じる。

### 結論

西欧における自我確立前段階の未分化な状況の象徴として太母像があらわれることを参照してきた。西欧においてはあくまでその段階は意識の発達史の中では途中の状態とされている。しかし日本においてはそのような中途段階の未だ自然とのつながりを保った状態こそが正しい意識の在り方、日常と感じられるのではないだろうか。

そもそも動き続ける大地という無常な場所で成り立っているからこそ、物事単独のイメージだけでとらえようとするのではなく、イメージをつなげあうことによってこそ、現実感のある表現が成り立つのではないだろうか。

そのようにイメージがつながることで成り立っているこの世界を表現するために最も象徴的なモチーフとなるのが太母像なのである。